

北満の記録(五) 収容所その一

収容所

不安はますます強くなる。これでソ連はわれわれを、日本へ送るつもりはないのではないか。送るつもりなら、こんな所へ入れる訳がないし、たまにたま都合よくここで病気が発生し下車、消毒、行動を順次調べ合わせれば、初めから計画的行動で、予定通りのコースである、日程も計画の一つだったのだろう。一週間経つても十日経つても出発の命令は来ない。その内列車はいなくなる。別の輸送のため、少し遅れるとのことだ。

ここに入つてすぐ、食糧は今まで通りすっぱい黒パンを支給するから、後は持っている食糧で当分賄うようにせよとのこと、各人の米、調味料を全部集める。

炊事班を各中隊より出して編成する。一か所の建物が炊事場となつていて、倉庫も中にある。此処で全部の炊事をする事となる。

九月中旬、寝ては起き、食べては寝る日々、毎日少しの体操をするだけ、体力はまだ大丈夫だが、精神的に参つて来る者も出てくる。手持ちの食糧も少なくなり、初めは飯号盒一つで四人分だった飯も、五人から八人分と量も少なくなり、不平が出てくる。

大の男ばかりなので、遊んでいても腹が減るのは当り前のことなのだ。交渉はするのだが、一向に埒があかず、上部からの命令がないとの一点張り。

おそらくこの辺りは沿海地方の、大陸奥深い山中だと思ふ。緯度も北へ五十度近い所であろう、九月に入るとかなり冷え込む。

体力と気力の衰えによる風邪が心配だ。日が経つにつれ、いろいろな情報が入ってくる。こんなに寒くなつて、我々を輸送するはずがない、ソ連軍の監視兵宿舎の水汲み、薪割りの使役から帰ってきた仲間の、聞いたきた話によると、

「お前たちはもう日本へ帰れない、日本は負けたのでお前たちは捕虜なのだ。此処でしばらく働かされるのだ」とのことらしい。

もう諦めるよりほかない。この寒いシベリアの山奥で、冬を過ごす気構えだけは心に留めて、気をしっかり引き締めておかないと、寒さに負けてしまう。

十月に入りやつと新しい命令がくる。寒くなり輸送も困難であり、海岸線が凍り、港が使えなくなるので、今年はこの冬を送つてもらいたいとのこと。口実と分かつていても、捕虜の身では従うはかない。来るべき時がきたのだ。ソ連の輸送引延ばし戦術で輸送は中止だ。輸送途中からみんな薄々感じてはいたのだが、それでも今日まで僅かの希望もあった。何がなんでも、たとえ草の根を噛んでも日本まで辿り着きたいとの夢も砕かれてしまった。

輸送中止と共に本格的な越冬準備にかかる。ソ連兵より一人に一個ずつの袋、細長い布製を渡され葦原に連れて行き各人の袋に一杯の干草を詰めるように指示を受ける。その通りに干草をいっぱい詰めて帰る。柵から外に出る時は三人に一人の監視兵がつく。帰所してから説明があり、干草を袋の隅々まで詰め込むよう指示され、多い者は少ない者にやり、

少ない者は多い者からもらうようにと指示される。これは各人の寝台代わりなのだ。初めから説明があれば、そのようによい柔らかい草を詰

めたものを、ただ運搬用に袋を持たせたもの思っていた。

今までは毛布を敷き防寒具を掛けて寝ていたが、今度は寝台が出来たので、体も幾分楽だ。しかし台に並べると一人に一つではなく、合わせ目に位置する者もいる、無理もない。一人分の間は五十から六十センチくらいしかない。次は薪運びだ、鋸を与えられ山へ誘導される。山といっても周囲は山林だから、枯れ木、風倒木はいくらでもある。

それを各人が持つ。数が多いから二、三本ずつ運んでもすごい量だ。寝るところも出来、薪の用意も出来た。食糧も十分とは言えないが支給されるようになった。すべての越冬の段取りが出来た。いよいよ連側の計画が始められるのである。

伐採労役（鉄道敷設道床架橋工事）

昭和二十年十月頃より、伐採作業に狩り出される。病傷人以外は全員。各班五名から十名位に分かれ、鋸、斧、鍬、つるはし等を配られ現場へと向かう。始めは收容所から南方へ二、三キロの場所だ。藪や丘を越えた所に着くと、東北にかけて五十メートル位の幅で立ち木に印が付けられている。

その印の中の立ち木を、すべて根本から切り、きれいに片付けるように指示される。

初めは何のためにこんなことをするのか、全く分からないまま作業を続ける。大勢でやるので広く長い所も進行が早い。雪の日も風の白も続けられた。初めは我々も、火防線だと思っていた。数日の間に何キロという空間が森林の中に出来上がった。

次に指示されたのが、沢に橋を造れと言うのだ。しかも機関車が乗っ

ても潰れないものを造れ、とのこと。ここで初めて線路を造るのだなということを知る。

橋を造る木は両側の林で必要な木をいくら使ってもよいとのこと。大小太さはいくらでもある。松類（日本でいうエゾ松、トド松、赤エゾ松、落葉樹ほか）が多く雑木は少ない。

五十メートル、百メートル位の大木がザラにあり、真つ直によく伸びており、大小いくらでもある。日本では見られない、天然の大森林なのだ。材料がいくらあるとはいえ、沢も大小深い所、浅い所、いろいろとある。沢の大小によつて班の人員を決め、段取りを個々の班で決めてから作業を始める。木を伐る者、それを運ぶ者、更にその材料を土台から順次組み立てていく。杭を打つようなことはなく、ある程度の強度を考えて材料（丸太）を並べて組込むのだ。

組みながら太さを決め、伐採を指示する。運搬をするものすべて人力だ。太さが五十から八十センチの、長さが三・五メートルから五メートル位の丸太を藪の中を人力で、五十メートルから百メートル、中には二百メートルの距離を運ぶのだから、並大抵の苦勞ではない。

太さ、重さにより四人から八人で、天秤で担ぐのだ。並大抵でない重労働が毎日続くのだ。中央線、高さが決められているので、作業場が別れていても、完成したときの高低差や直線差はほとんどない。しかし、沢の深い、広い場所が、これは最後まで難渋した。

雪が降り滑って仕事が進まず、危険なことも多くあった。我々が橋造りをしている間、別の者は数キロ先へ連れていかれ、そこにあらかじめ山積用意されていたレールや枕木を使って、そこから線路を敷き始める。ソ連式の鉄道敷設は冬季節だけの使用線路なので簡単なのだ。凍結した地盤に枕木とレールを水平に並べるだけなのだ。

山の中に分散して作業をしている捕虜を警戒するソ連兵も、三人に一人ぐらいの割りで付いており、また非常に厳しい。木を一本切るのにも五十から八十センチとなると大木である、素人ばかりなので、大変なことである、鋸も両引きの帯鋸なのでうまく使えない。寒さと疲労で休むことも多くなる。ソ連兵は「ドバイ、ドバイ、ペストリー」と来る。銃で小突く（早く仕事をしろという）。

天秤で担いだり、テコの応用で転がしたり本当の悪戦苦闘、文字どおり馬並みである。体力のない者は倒れてしまう。弱い者はなるべく力の少なくかかるころへ回す。重労働を越した超重労働だ。

捕虜だから馬車馬のように使い倒れても、ソ連側には何ら損はないのだ。自分たちの目標を達成すれば良いのだから。

「労働者は皆仲間だー資本家は敵」と主張しながら自分たちさえ良ければ他はどうなつても良いという今のソ連のあり方だ。

苦闘の連日が続く。

十月の末ともなると、雪も積もり、土は凍り、川は氷が張りつめ、大変な寒さ、日中でもマイナス十数度の寒さだ。働いているほうが、むしろ寒さをしのぐことが出来る。

食糧も少なく栄養も摂れず、体力が次第に弱ってくる体にこの寒さと重労働だ。この頃、体力のない者、気力の弱い者などが疲労と風邪で次々と倒れていった。慣れない作業での疲労が、そして栄養不足が最たるものであった。

持ってきた防寒服の新品も、荒い作業で傷み方も激しくなる。すぐに補修しておかなければ、破れ目から凍傷になってしまう。捕虜の待遇については国際法で決められているはず、居住、衣類、食糧の支給、過激労働の禁止、虐待、他いろいろある。しかし、勝者は自分たちの有利なよう

に解釈して、（特に共産圏）捕虜の扱いをするので、たまったものではない。

衛生

我々が持つて来た食糧も十一月まで食い延ばし、後支給となる。

昼食は黒パン（この頃は酸っぱい味にも慣れて腹に入るものならば何でも食べられる）。朝夕は穀物（ゴウリヤン、粟、芋、豆）類で何が支給されるか分からない。量も少なく、重労働に耐えられるものではなかった。朝食と昼食を一緒に食べても腹八分目だ。

十二月に入り、毎日マイナス二十度から三十度以上になり、寝ても寒いので防寒外套を着て、防寒靴を履き、防寒帽子を被り、毛布を掛けて完全装備で寝る。

五十から六十センチの狭い場所で、これだけの防寒具を着用すると、寝返りをしたくても全く動きも取れない。日中の疲れなど全く取れない疲労は蓄積するばかり。冬になると小川も凍結して、水不足のため洗濯も出来ない。まして石鹸もない有様だ。

これも我々が作業に出て留守中ソ連兵（留守の兵）が来て持ち物検査といつて、各人が部屋に置いてある包み、袋などを開けて、目ぼしいものはみんな持つていくのである。後で話し合っても、どうにもならないとの事、指揮官どうしの話し合いで申し入れるが、

「そんな事をするわけがない。検査は危険物を持つているかどうか、調べただけである」

とそしらぬ顔だ。当日の検査兵に質しても、知らないで終りだ。

これでは大事なものは自分たちで守るしかなく、時計などは石鹸を溶

かして油紙に包んで中に入れ流し込み外側を使って、石鹼を使い古したようにしておくのだ。使い古しは持って行かないからだ。

腕にしていると取られてしまう。兵隊が特に欲しがるものは、時計、万年筆、石鹼、鏡、ほか日本人の持ち物は何でも欲しがる。

物交はよい方で、中には脅しや集団で取り上げてしまうこともある。前に戻るが、水不足のため洗濯はもとより、顔さえ洗えない、洗っても布まで凍ったら困る。何日も何か月も洗濯もせず、暖かいときもあり汗をかくときもあり、みんなすごい異臭だ。

しかし、みな同一の生活で慢性になり、何とも思わない。こんな状態だから「シラミ」の発生がひどく痒いのが過ぎて慢性化してしまい、一向に気にならなくなってしまう。朝、外へ出て太陽に当たると襟口、袖口から外へ顔を出してくる。

朝、作業に出る前、外で点呼をするので二列に並ぶと、前の人の背中に這い出している「シラミ」取りをする。自分の血を吸っていると思えば捨てるのも惜しい。全く獣並だ。

部屋の中では明りに、松脂を使っているの油煙がすごい。外に出るとそれぞれの顔は黒くくすんで、目だけがギョロ付いている。異様な姿だ。

「シラミ」がひどくなると、山から薪をもつて帰る。日曜日は必ず全員が休みなので、収容所内に一つある深い井戸（炊事用だが洗濯以外なら使える）から自分の飯盒で水を汲んで湯を沸かし、その中へ下着等を入れて蒸すのである。

服の上下、毛物、外套などは外の氷のうえに広げ、時間を置いて動きが止まっている内に振り落とすのだ。後の方法が一番簡単で早く、多くの人たちはこの要領を用いた。

また、あるいは作業に出たときに、寒いので必ず焚き火をする。そこで

急いで裸になりシャツを火に炙る。このときこがしたり火を付けたりしないようにする。失敗して本当に裸になった者もいた。「シラミ」が熱くなって動きだした頃を見計らい振り落とすのである。

縫い目に入っている「シラミ」や卵は縫い目を木のうえに置き、硬い物で叩いて潰す。大量にいたのでこの方法でなければ処理が出来ない。これで少しは楽になる。しかし、ソ連の監視兵のいないとき、素早くやらねば、見付かると、雪の中へ下着などを投げられてしまう。

病人

病気や怪我をすると、ソ連の軍医が来て見てくれる。女性の軍医の時もある。日本の衛生兵なら、だれにでも出来るような診察の方法だ。

表面に出る怪我などは良いが、腹痛など内臓の痛みは困る。本人が痛さを表現しなければ認めてもらえない。風邪は三十七度以上なければだめ、表面に出ている傷、出物ははつきりしているので診断も早い。

しかし、腹痛と診断されると、食事を欠くか、半食にされるので困る。日本のように粥食はない。次の診断（二日後）でよしの声が掛かるまで食事抜きでは全く体が持たない。これ以外の病人だと付き添って行く衛生兵も、説明に四苦八苦だ。

軍医の決定がなければ、仕事も休むことは出来ないのだ。仲間の中には、ずるける者もいて、少し熱があると診察を受ける届けを出す。しかし朝に

なり熱が下がっているときは、あらかじめ石をストーブで焼き、布に包んで持っていく、体温計を入れる前に脇の下に入れておき、体温計を挟んで温度を上げ、丁度良いところで差し出すのである。

軍医は体温計を見て、頭に手をあて首をかしげているが、熱があるので「休んでよし、オーケー」となり、一日休みの許可が出るのである。次の日一日はゆっくり休むことが出来る。

二日目、再び診察となり、診断するが熱がないので

「明日から仕事に行きなさい」となる。

これで三日間の休養が出来るのだ。

この方法は隊内で計画、休養を取らせるため無休の者に交互に行い休ませていた。この計画は最後まで、この地で秘かに行なわれ、ソ連側には知られずに終わった。この方法は元気なものが苦勞するばかりで、全く休養が取れず、慰勞のために取られた処置で各班が実施していた。しかし、日本側幹部には知らせず、幹部もまた黙認していた。

昭和二十年十月末より始まった、測定地の伐採から、土工、橋工作も十二月末ではほとんど完了し、後は線路の敷設だけとなる。一部手直しだけとなり、次の仕事へと繋がっていく。遊ばせておくということはなく、次々と作業が仕組まれている。

昭和二十一年一月一日、とうとう酷寒のシベリアで、正月を迎えることになる。当日は朝から快晴の凍れた朝だった。マイナス三十五、六度はあったろうか。七時頃、全員が外に整列し、隊長指揮のもと「日本、太陽」に向かい厳かに礼拝を行なう。

ソ連側はこの行動に対して、びっくりし、飛んできて「解散しろ」とどなる。日本人の風習として、一年の無事と健康を太陽に祈っていると説明すると納得する。

監視の居ないところでの集団行動が、一番恐れられている。

収容所の回りに三重に張り巡らされている鉄条網、四方には高い監視所があり、一日二十四時間監視兵が上つて警戒している。

内側の鉄条網に少しでも近付くと、威嚇発砲して来るので、三メートル以内は近づかないこととなっている。

ここは戦前、政治犯が入つて居た、監獄の跡とのことである。後で分かったことだが、反共産、政治犯の重罪人の多くを酷寒の未開地へ送り、重労働を課した施設がこの地方に多く、ここもその一か所とのことであつた。

伐採(輸送用)

昭和二十一年一月より本格的な伐採作業となる。三人一組ずつの組が作られる。ある程度平均的な労力になるように入れ替えも行なわれる。

各組に鋸(両引きで一メートルから一、二メートル位のもの)一丁、斧二丁が支給される。一組に一人の監視兵が付く(勿論自動小銃を持っている)。

前記の伐採地から更に一キロほど入った所で、密林地帯である。松の大木が生い茂り、昼なお暗いという状態で、あたかも北海道の山奥へ行ったような感じだ。雪が四十から五十センチ位あるので何とか明るさは保っている。しかし大木の割に、小木が少なく見通しは案外良いようだ。

現場では、先ずソ連側の伐採担当者から説明を受ける。切り倒す木は五十センチ以上の針葉樹で、(赤松、葉の長い五葉松) 出来るだけ根本から切り、梢は二十メートルの所で落とす、枝は全部切り払って焼却する、これで完了なのである。

しかし、作業をする全員が素人であり、高さが五十メートルもあり、直径が五十センチもある木を誰も倒したこともないので、切り倒し方か

ら説明させる。この分だけ今日の分は若干省ける。伐採については半分の者がそれぞれ独自の経験を積んでいる。

初め木の伸長具合から地形により、倒す方向の選定から始まり受の切り取り方法、鋸の使い方など小さい所まで質問し指導を受ける。担当者も丁寧に教えてくれる。この人は森林監視員の様だ。

班ごと百メートル以上離れて作業をし、木が倒れるときは、大声で合図をする。樵（きこり）の掟を教えられる。

各班それぞれの指示された方向へ分散する。百名以上もいる仲間が、組になつても数十組が分散するので、かなり広域になり監視のソ連兵も大変なようだった。

山の中で三名ずつの分散だ。我々もこの地理不明の地で、ましてや酷暑の季節に、逃亡など出来る筈もない。日本へ帰してくれるまでは、元気で居なければ、ならないのだ。

食を求めるには働かなければならないのだ。このソ連（共産国）は労働力をノルマで表わし、ノルマによって賃金を支払い、食物を支給する制度であり、我々も食を得る為に「郷に入れば郷に従え」で出来ることは指示に従おうということ皆真剣に取り組む。

ただでさえ寒い酷寒の地でのましてや山の中、太陽の顔も見えず寒々と底冷えがする。風が吹くと枝に積もった雪が風雪となり山中を舞い視界を遮断する。山の中という淋しさはないのだが…

自動小銃を持った監視兵が常に三人の側に居るので仕事をサボることも出来ない。言葉は互いに分からない、必要な時は手まねだ。ソ連兵もやはり人の子、山の中で三対一ではいくら銃を持っていても怖いのだ。それは当然だろう。我々（挿虜）には鋸と斧を与えている、刃物を持たしているのである。銃口を向けて、我々の行動を見守っているのだ。決し

て近くへは寄らず、一定の間隔を保っている。苦勞なことだ。

寒い…伐採する手頃な木を選び準備にかかる。回りの下木（小木）を全部整理し足元をよくする。木の枝ぶりにより（枝の多い方）木の倒す方向を決めて、逃げ道を作る。

いよいよ切り始める、鋸の使い方は以前にも経験があるので、大分巧くなってきた。然し今度は本格的な伐採である。以前の伐採は玄人の者が倒し、横切りは素人でも大して危なくないので誰にでも出来た。

立ち木を切るとなると大変だ。鋸を横に使い両方で呼吸を合わせて交互に引く。足場も悪くなかなか難しい。五分の一ほど切ったところで「受」を作る。「受けは、木が裂けたり予測以外の方向に倒れたりしないように、倒す方向を三角に削るのだ。

そして次は斧（タボール）で受けを削るのだがこれもまた大変。玄人のいる組は何組もなく、ほとんど素人ばかりの組である。大木を倒すのは初めての者ばかり。小さい木であれば、押せば思った方向に倒れるから心配はないが、大きい（太い）木であれば受けを切っても思うように倒れてくれるかが心配だ。

切っていくのも互いの呼吸が合わず、さっぱり進まない、そのうち何とか切り込んでいくに従って、木がバリバリッ…バキッと鳴ってくる。

木が鳴る度に鋸を投げ出して逃げ出す。しかし木は倒れる様子もなくまた恐る恐る近づいて鋸を引く。またバリッと音がして逃げる。そんなことの繰り返しで木は全く倒れない。バリバリッと初めて大木を倒したときの喜びは、今でも忘れられない。

バリバリッ…ドドドーンと大木が倒れる様は壮観だ。一本の大木（直径五十〜七十センチ）を倒すのに半日も掛かった。枝木を払い落とし、燃やすのだが、火を起すまでがまた大変。大木なので枝も太くなかなか

燃えてくれない太い枝は大変だ。残すとノルマにならないので枝焼きと
いつても楽ではない。

木を倒す前から火床作りも大切な仕事なのだ。この伐採作業が始ま
った時から作業はノルマ制となる。

ノルマは通常は八十〜百パーセントである。甲、乙、丙、の労働力を平
均したものとすることである。すべての労働に対してノルマが決められて
いる。五センチの釘一本抜いてもノルマがあり、直径が一メートルの土穴を
一メートルの深さに掘って、 \times パーセント。直径が十センチで高さ三メ
ートルの木を一本倒して \times パーセントとなる。

その他状況により申請者の申請で(+)がつく。しかし甲、乙、丙の平均
とはいえ、誰にでも出来るものではなく、よくできる者、普通の者、あま
り出来ない者、この平均は普通の者となる。普通の樵の仕事は素人がす
るのだからノルマが上がるはずがない。

国際捕虜の規定の待遇をするには八十五パーセントのノルマが必要との
ことだ。国際捕虜規定で各人の衣食住は自分で働いた賃金で賄えとは
言っていないはずなのだが…。

そこは共産国、働かない怠け者には食も金も与えないという主義で、
捕虜にも労働を課しノルマを押し付けて来たのだ。自国の主義主張に都
合よく解釈してしまうのである。

衣は各人新品を着て来たので当分は間に合う。食も持って来た物で一、
二か月食いつなげるし、住いについても、以前政治犯を収容していた空の
監獄だから生命維持には何とかなるだろう。

彼等のいうには、初めは遊んでいては身体によくならないから運動にと使い、
次第に計画的労働にかり出し、いよいよ食糧も無くなり支給を要求す
ると、それでは一生懸命働いてもらうという。

働きの量により食糧を支給するというのだ(明らかにノルマだ) 少なく
とも五十パーセント〜六十パーセント位働いてもらわなければ普通量の
支給は出来ないというのだ。

伐採作業は立ち木 (元切口) \times 長さ(梢二十センチ) \parallel ノルマ一日
に三本倒す (五十センチ〜八十センチ位のもの) 六十〜九十パーセン
ト位が(六十〜九十パーセント) \cdot 三人 \parallel (二十パーセント〜三十パー
セント)一人当たりとなる二十〜三十パーセントのノルマであると食糧も
半分である。そんな量では生命維持はおぼつかない。

午前中に急いで三本切り倒す。これも状況の違いで異なる、午後から
枝払いとその焼却をする。これが夕方までいっぱいかかる。枝の焼却も大
変で、余り大きな火にも出来ず、全部焼却しないとノルマにならないのだ。
初めは五十〜一〇〇センチ位の枝の少ない場所のよいところを選んで
切ったので段々太い木や枝の多いもの、中には曲がった木が多くなる。

元木一メートルもある太い木になると、二本倒すのがやっと、状況も
悪くなりノルマが上がらない。ひどくなると残業となる。

大陸の冬は白夜が多く、明るいので時計を見ないかぎり、時間は分か
らない。腹のほうはいつも空腹だから腹時計は駄目。残業は夜九時〜十
時頃まで、山の中は午後三時頃より急に冷えだし、六時頃になると一
層厳しくなる。しかし、この時間帯は枝の焼却作業なのでたいして応えな
かったが、残業は身に応えた。この他残業も早く終わった組は未だ残ってい
る組へ手伝いに回る。帰舎はあくまで一緒だ。

帰路はみんな疲れを忘れるため、童謡を唄って帰る(軍歌は一切唄わ
ず)。「夕焼け小焼け」が一番多かったように思う。寒さと疲労で帰って
も宿舎に待っているのは少ない食事、腹五分とまでもいかず、食後はすぐ
横になる(着たまま、防寒靴も履いたまま)。疲れているのですぐ寝つい

てしまう、朝まで一気に眠る。

朝六時起床。再び同じ行動が始まる。相変わらず少ない朝食を取り、昼食用の黒パン(小さい)の支給も一緒に食べてしまう。それでやっと食事をしたような腹だ。

松の実

朝食と昼食は一度に食べるので、昼食はなし、昼食の代用は山に着いて作業に掛かる前に選別する？ 伐採している木に松の実が付いているのだ。

日本では松ボツクリ、あるいは松笠といっているもので、これがまた大きく拳大もあり、一本の木に多いもので、百個以上もついている。

松笠の葉一枚に一個の実が入っているが、小指の爪ほどの大きさの実で、味はちよつとヤニ臭いが、中味はピーナツのような味で実に旨い。この木もいろいろいあつて、実がたくさん付いている木、少ない木、全く付いていない木があり、それを見分ける。今日の昼食はこの実なのだ。この実を食べて腹を満たすのである。

ここに一つ心配なこと、用心しなければならないことがある。警備兵のいることだ。組に一人いる警備兵の目をごまかすことだ。初めから折半するように話を持つていく、折半が駄目なら実の付いている木は切らさずに後にする。

警備兵の中にもよい人間と程度のすこぶる悪いやつがいるので、仲間どうしで連絡し対応する。我々にとっては生きて行くための、大切な食糧なので必死だ。

警備兵を仲間の兵が呼んでいると、嘘をついて行かせた後、急いで実の

付いている木を倒し、実を拾って雪の中に隠すのだ。実のあまり無い小サイズの松笠を適当に雪の上ほうり投げて置く。兵隊が来てその中から選んでもつて行く。枝払いをした枝を焼きながら、実を焼いて松脂を落し、木の上で叩くと実だけがボロボロ落ちる。

少し温かいうちに食べると、外側の殻も柔らかくなくなかなか味がある。余分の実を袋に入れて持ち帰り宿舎で、仲間と分けて食べるのだ。いつでも実のある木ばかり切れることも出来ず、食にありつけない日もあり、そのときは空き缶で(これは必ず持ち歩く) 雪を溶かしてお湯にして飲む。これで我慢をするのである。